

第2特集

Patient Journeyと 口腔管理・ケアの伴走

口はその人を診る入り口であり、 全身の鏡であり、突破口でもある

口腔管理・ケアは、歯科の領域に閉じた「歯の問題」ではない。機能から見て「クチ」と「全身」の境目はどこにあるといえるだろうか。口は、食べる、話す、息をする、味わう、表情をつくる、そして人とつながるための、生活のもっとも可視的で前衛的な基盤である。しかし日常診療では、糖尿病と歯周病、誤嚥性肺炎と義歯、薬剤性口腔乾燥、周術期合併症、フレイルや摂食困難そのものの問題、終末期の苦痛など、口が関与する問題がしばしば見過ごされる。Patient Journey（患者の旅路）の視点でみれば、口腔管理・ケアは病前から急性期、慢性期、在宅、人生の最終段階まで途切れず伴走すべき介入である。**プライマリ・ケア医が担うべきは、歯科診療の代替ではない。**口を診て、変化に気づき、食べにくさ、話しにくさ、息苦しさ、感染リスク、セルフケア困難を拾い上げ、必要なケアと医科歯科連携につなぐことである。本特集では、common diseaseの診療に口腔ケアの視点を編み込み、明日から「口から“その人”を診る」ための口火を切るその一歩としたい。口を診ることは全身を診ること、そしてその人の生活を支えることの始まりである。

編集幹事

上野原市立病院
内科

松本朋弘